

生活習慣と歯列咬合の関連性についての検討 第1報

○有田有沙、有田光太郎、友重文子、川口芳巳、
有田信一
ありた小児矯正歯科

【目的】

私たちは、生活習慣を整えることで、正常な歯列咬合の発育支援を図ってきた。第9回九州矯正歯科学会学術大会(2014年)では、継続的な健康教育の実施により、約30%の小児に乳歯列咬合に空隙が生じることを発表した。今回は、初診患者の生活習慣と下顎乳歯列の状態の関係を検証することを目的とした。

【方法】

平成27年度に来院した6歳未満の初診の小児232名を対象に、1)食事時の水分摂取の有無 2)就寝時の態癖 3)口唇閉鎖の状態を年代別に集計し、下顎乳歯列の状態(有隙型歯列、閉鎖型歯列、叢生歯列)と上記の3つの生活習慣との関連性について検討を行った。

【結果と考察】

1)下顎の歯列の状態は、有隙型歯列41.8%で、閉鎖型歯列31.9%、叢生歯列26.3%であった
2)食事時の水分摂取は、0～1歳に比較して、3歳代の子どもに有意に多く、約76.5%が水分を摂取していた。また、就寝時の態癖があるのは全体の38.4%、口唇閉鎖が不良なのは61.1%であった。
3)水分摂取の有無、就寝時の態癖、口唇閉鎖の状態と下顎歯列の状態(空隙型歯列、閉鎖型歯列、叢生歯列)との有意な関連性は認められなかった。歯列咬合の良好な発育を阻害していると思われる食事時の水分の摂取者、口唇閉鎖不良者は6割以上いたが、下顎乳歯列の状態には差が認められなかった。このような生活習慣と歯列咬合の発育に関する事実を明らかにして、今後の健康教育に生かしていきたい。

親子への歯科健診を活用した3歳児の齲蝕罹患に関する要因の検討(第2報)

○森高久恵*、板家 隆*、今村 均*
邵 仁浩**、
(*北九州市歯科医師会、**九州歯科大学地域健康開発歯学分野)

【目的】

北九州市の3歳児の齲蝕有病者率は全国平均を上回り、依然として高い有病状況にある。我々は適切な時期に適切な予防対策を講じるため、第一報に引き続き親子の歯科健診データを用いて、1歳6か月時点の生活環境が3歳までの齲蝕罹患に及ぼす影響を分析し、評価したので報告する。

「方法」

対象は、平成23年度に1歳6か月児歯科健康診査を受診した者で3歳まで追跡可能であった3,577人である。1歳6か月から3歳にかけての新規齲蝕発生および齲蝕多発傾向(df歯数が3本以上と定義)に関する要因について多重ロジスティック回帰分析を用いて分析した。

「結果」

新規齲蝕発生の要因は、親歯科健診を受診していない(オッズ比1.42)、卒乳を完了していない(オッズ比1.68)、ほ乳瓶を使用している(オッズ比1.57)、ジュース等をよく飲む(オッズ比1.78)および間食時間を決めていない(オッズ比1.52)であった。また、齲蝕多発傾向の要因は、卒乳を完了していない(オッズ比1.39)、ジュース等をよく飲む(オッズ比1.46)および間食時間を決めていない(オッズ比1.39)であった。

【考察】

1歳6か月時点の生活環境が3歳までの新規齲蝕発生に関連することを検証し、新規齲蝕発生抑制に関する親歯科健診の有用性を示唆したことは意義のあるものと考えられる。一方、口腔内環境がさらに不良である齲蝕多発傾向に対しては、親歯科健診は有意な関連を示さなかった。齲蝕多発傾向に導く生活習慣・行動要因においては、親歯科健診の有用性と比較して、社会環境などの別の要因がより強く影響している可能性が示唆された。